



# 追悼・羽山太郎（佐藤秋雄）

写真：講談社エディトリアル  
〔追想にあらず  
1969年からのメッセージ〕より

北山峻

五月二十四日、六〇年安保闘争以来の闘士・羽山太郎が逝去しました。享年七十八歳。羽山は、この十年来、二度の癌の手術を乗り越えて活動してきましたが、今回三度目の肺癌とその全身への転移によって遂に斃れたのです。

真珠湾攻撃が行われた一九四一年の秋、福島の農家に生まれた羽山は、幼いころから農作業に従事し、農業高校を卒業した後、東京で働きながら専修大学の夜間部で学び始めましたが、すぐさま六〇年安保闘争の高揚に巻き込まれその運動に参画したのでした。安保闘争で果敢に戦った「ゼンガクレン」とその中核組織であった共産主義者同盟（ブント）に参加した羽山は、その後六十年、数々の闘争の果てにその志半ばにして斃れたのです。

羽山太郎が、社共に代表される既成の左翼だけでなく、数々の「新左翼」の凡百の活動家たちとも決定的に異なっている特徴的な点を数点あげると、第一に、明治時代の幸徳秋水や堺利彦などの『平民新聞』以来、「主義者」といえば青白いインテリで、体は虚弱だが頭でっかちの観念的な空論家を連想しがちな中で、羽山太郎はそれとは正反対

で、少年時代から福島のア達ヶ原で馬を乗り回し、大家族の中で重労働の農作業を担って鍛えられた屈強な肉体派だったということですが。

それ故に、羽山は、肉体労働によって世界の富を生産する農民や漁民や下層の労働者との違和感もなく交流できたばかりか、言行一致で実践第一の運動家でした。

明治以来の天皇制社会体制と同様、東大や京大などの学歴だけが自慢のインテリが指導者として幅を利かした左翼の指導者の中でも、羽山は「若いこと、無名であること、貧しいこと」という、中国土着の共産主義者毛沢東が述べた理想の革命家像を彷彿とさせる異色の人物でした。

第二に、羽山太郎は、コロンブスの「新大陸発見」以降、英・仏・独・蘭・西・露などの西欧列強が、南北アメリカ大陸をはじめ、アフリカ大陸、インド亜大陸や東南アジア、中国大陸、中東諸国やオーストラリア大陸に至る世界各地を強盗的に侵略し、世界中の多くの民族を蹂躪し、大収奪していった過程を、かつてマルクスやエンゲルスが「文明的・進歩的な資本主義が野蛮・半未開の遅れた世界を文明

化していく過程である」と、侵略者の側に立つて発言していたのに対して、これに真っ向から反対したことです。同

時に彼は、この流れの現代版であるところの、支配的な強盗民族が多くの弱小民族を食い物にし続けている世界に怒りを燃やして、常に被抑圧民族や被抑圧人種の解放闘争に想いをさせていたのです。そして、そこから日本の少数民族であるアイヌ民族と琉球民族の解放闘争に対する献身的な取り組みを行ったのでした。この戦いの中で羽山は、逆に自分自身の中にある支配民族特有の邪悪な優越感を一掃し、自らを純化し解放してきたと述べています。

二十一世紀の日本の革命運動を語る時、羽山が指摘したように、このアイヌ民族や琉球民族の解放闘争に正面から取り組まない者は、もはや革命家とはいえないでしょう。

第三に、羽山太郎が人生を通じて一貫して強調してきた革命の重要な論点は、万人の生存のための食糧を生産する農民や漁民こそが人類を根底から支えている人々であり、農民階級は、さまざまな社会的危機の際には農民戦争によって国家社会を根底から覆し、歴史を前進させてきた階級であったという歴史的事実、そして二十世紀のロシア革命や中国革命なども明らかに農民革命なのですが、今後の世界革命の過程でも農民は革命の一大勢力となるという確信です。

マルクスやエンゲルスが『共産党宣言』の中で、資本主

義の進展とともに日々没落する運命にある農民階級は、資本主義の進展に反対し歴史を逆転させようとする反動的階級であるとして真っ向から反対してきたのでした。

第四に、さらに羽山の偉いところは、六〇年代から長年にわたって対立と分裂を繰り返した新左翼のセクト主義の真っただ中にいながら、「反内ゲバ主義」を貫いて、やられても一度もやり返すことなく粘り強く闘争を堅持してきたことでしょう。

これらのことは、羽山が、死の直前に出版した『日本農業の復権』（二〇一三年・豊島文化社刊）、『ブント―その経験の一断面』（二〇一九年・JCR出版刊）、『アイヌ・琉球』（二〇二〇年・JCR出版刊）の三冊に詳しく載っていますので、ぜひご覧ください。

羽山太郎は、二十世紀後半の日本に現れた稀有な、独創的な共産主義者だったのでしょうか。

彼の純朴で光り輝くダイヤモンドのような魂は、今も天高くから世界を見守っているに違いありません。

「秋雄さん、そう遠くないうちに、またコーヒーでも飲みながら談笑しましょう」 合掌

二〇二〇年六月四日